

俺は都内の喫茶店で相手を待っていた。午後2時50分。あと十分ほどで来るはず。俺はなんとも落ち着かない気持ちで、レトロで洒落た店内を見渡した。待ち合わせ相手とはまだ会ったことがない。若松美月、27歳。黒髪、ボブのストレートヘア、長身。それらしき人物が入ってくるのを待って、入り口のあたりを眺めていた。

すると、カランカランとドアベルの澄んだ音が響き、銀色のサンダルがドアマットに現れた。急いで視線を上げると、全ての特徴が一致する、キリッとした目元が美しい女性が入ってきた。颯爽とした立ち姿は芍薬の花のようで、文句なしに綺麗だった。俺は立ち上がった。女性は俺と目が合うと、嬉しそうに笑った。

「こんにちは！上杉さんですね？」

「はい、上杉良です。初めまして」

少し前に話を戻そうか。28歳の誕生日、お袋から電話がかかってきた。

「ねえ良、誰かいいひといないの？」

いないよと即答すると、お袋は早口でまくし立てた。

「良、もう三十近いじゃない？そろそろお見合いしてみたら？お母さんね、結婚相談所のパンフレットもらってきたのよ、だからね」

「いや、俺まだ結婚する気は・・・」

するとお袋は涙声になった。

「あのね、お姉ちゃんとのなっちゃん、この前・・・」

「ど、どうした？」

「・・・いところが欲しいって言ったんだってえ、ええーん。お母さんももっと孫が欲しいよ  
おおお、わああん」

「はあ・・・」

面倒くさ過ぎる。俺は携帯も肩もがくりと落とした。

「・・・で？俺はそこに登録すればいいわけ？」

「分かっているじゃない、良ちゃん！」

急激に明るさを取り戻したお袋の声に、さっきまでのアホみたいな泣声は全て演技であったことに気付いたが、既にあとの祭りだった。

お袋に泣かれ結婚相談所には登録こそしたものの、正直面倒なので放っておいた。すると、職員からだけではなく、お袋からも電話がかかってきた。

「こうらあっ、良！！」

「はいっ！・・・なに」

「まだ一件もお見合いしてないらしいじゃない！いい？明日の3時『三日月珈琲』に行き

なさい。そこに黒髪ストレートボブ、長身のクールな美女が来るからお見合いしなさい分かった？名前は若松美月さんよ職業は、ひ」

ブツッと途中で電話が切れた。嵐は過ぎた。しかしまた別の嵐がやってきそうな気がする。まあ、一度でもお見合いすればお袋の気も収まるだろ。そう考えて次の日俺は三日月珈琲に足を運んだ。

「はじめまして、お会いできて本当に嬉しいです」

若松美月が心底嬉しそうに言った。

俺は内心、怪訝に思った。平凡な顔立ち、平均的な身長、特に特徴の無い食品会社勤務で、年収月並みの俺に会えてそんなに嬉しいか？

「私、ずっと上杉さんにお会いしたかったんです」

「どうしてです？」

俺は若松に尋ねてみた。

「それはね」

若松はドキリとするほど綺麗に笑って言った。

「私、こんなに綺麗な人、見たことがないって思って！」

俺は、自分の右後ろを確認してみた。続いて、ゆっくりと左後ろだ。誰もいない。

「ん？」

若松は、そっと自分の両手を俺の両手に絡めてきた。俺はぎょっとして手を引っ込めようとした。すると若松は、そうはさせるかとガッシリ指を絡めて掴んできた。なかなか怖いぞ。

「字が！」

一瞬間をおいて、俺は聞き返した。

「字が？」

若松美月は嬉しそうに頷いた。

「字が」

何の取り柄もない俺にも、一つだけ特技があった。書道だ。姉貴の子にあたる姪の夏樹、通称なっちゃんが5歳の頃、書道を習いたいと言い出した。姉貴は仕事で忙しく、当時高校生だった俺がなっちゃんの送迎をした。姪っこの見せてくれる作品が思いのほか上手いので、感心した俺も送迎ついでに本格的に習うことにし、今では師範資格まで持っている。今思えばなっちゃんに感謝だな。

「上杉さん、日本文化会館の書展に出展されてましたね。拝見しました。シンプルだけど、

男らしい。繊細さや華麗さは無いけど、それがかえって素朴で、ずっしりとしたぶれない芯を感じさせて。若干丸みを帯びた字から、どこか可愛らしい人柄がにじみ出ている」  
若松は立ち上がった。

「今までに見た中で一番綺麗な人…率直に申し上げて、好きです。私と結婚してください」

今や、三日月珈琲の全客が会話を止めいぶかしげな表情でこちらを見ていた。全員「お前が『今までに見た中で一番綺麗な人』か？」と目で問うていた。いたたまれない。

「字が？」

「そう、字が」

「座りましょう。そして、落ち着きましょう」

俺はむしろ自分に言い聞かせた。

「おそ松さん、私もあなたにお尋ねしたいことが」

「若松です。はい、何でしょう」

「あ、すみません。…つい。すみません。あなたは書道家か何かですか？」

若松は首を振った。

「いいえ」

綺麗に切り揃えられた髪がさらさらと揺れた。

「どうして、そんなに私の作品を気に入っていただけなのでしょう。他にも素晴らしい作品が沢山ありましたよね。それに、綺麗な人というのは、この状況ではこちらの台詞です。若松さんなら婚活する必要ないでしょう？」

若松はいたずらっぽく笑った。

「いいえ、あなたの作品は飛び抜けて素敵でしたよ。それに、結婚相手を探すには結婚相談所がいいんです。普通の会食だと字が見えませんから」

「書類の字を見たかったんですか」

「その通りです」

「はあ」

「あなたの字！タダ者じゃないと思いました」

若松は俺の指をへし折らんばかりに力を加えてきた。俺はたまりかねて、無礼を承知で若松の指を一本一本剥がしにかかった。

「…光栄です。でも若松さん、少し性急過ぎませんか。私の字がいくらあなたのタイプでも、私はもしかしたら、とんでもない変質者かもしれませんよ。もちろん、あなただっただけでも綺麗な人ですけど、前代未聞のサイコパスかもしれない。そうしたリスクはお考えになりましたか」

若松はとんでもないとばかりに目を見開いた。

「そんなはずがありません！だって、人の目と字は、嘘をつけませんから」  
俺は若松の指を剥がすのに苦戦しながら聞き返した。

「嘘をつけない？」

「ええ。私、申し遅れましたが、都内で筆跡鑑定士をしています」  
若松はあっさり俺の手を離すと名刺を取り出し、丁寧に俺に渡した。

『若松美月 筆跡鑑定士』

俺は名刺をしげしげと眺めた。

「筆跡鑑定士？」

「ええ。お客様の筆跡を鑑定し助言等させていただきます。あなたにはこういう性質があるから、こういうふうに字を直したらいい、という様に」

「へえ」

「字はその人を映す鏡です。だから字を変えれば、人は変わることができる…人の目と字は決して嘘をつきません。絶対です」

若松は得意げに笑った。

「そして今日、あなたの目を見て確信しました。私は間違っていなかったって！」

「だからどうしてそうなるんです」

俺は困り果ててあたりに目を泳がせた。

この店は例の結婚相談所御用達らしく、カップルにしてはぎこちない二人組が沢山いた。  
しかし、こいつらは自分たちの見合いそっちのけでこっちを観戦していた。

「あの、すみません」

俺たちの真横に座っていた二人組の男女のうち、男の方が俺に声をかけてきた。

「これほどの美人にそこまでいわれたら、もう結婚するしかないですよ。羨ましい」

「ちょっと優君！」

「ああ、もちろん美帆ちゃんは別格に綺麗だよ。そういう意味じゃないよ」

美帆ちゃんとやらは、もう優君ったら、とかいいながら嬉しそうに膨れて座った。

すると間髪入れず、今度は俺の後ろに座っていたカップルの女の方がこちらを振り返って俺に懇願してきた。

「お願い、もう結婚してあげて！」

「おい真美！他の人の話に、口をつっこむんじゃない」

真美とやらは切羽詰まった表情で相手の男を振り返った。

「だって！この人たち結構話も合いそうなのに、女の人の話のテンポが速過ぎて、男の人の方が全くついて行けてなくて。聞いててまどろっこしいんだもの！」

「分かったよ真美。この人たちの幸せを祈って、ひとまず座ろう」

下手したら店内の全員が物申してきそうな雰囲気だ。若松美月はどこ吹く風で涼しい顔

だ。カラカラと氷をストローでつつきながら、長い足を組んでレモンティーを飲んでいる。

「じゃあ、こうしましょう」

若松はグラスを置いた。

「ん？」

「私と賭けをしましょう。私が勝ったら、私と結婚を前提にお付き合いしてください。良さん。もう一度言います。好きです」

俺はどっと疲れを感じて、熱いおしぼりで顔を拭いた。

「で、俺が勝ったら？」

「私の負けです。私は自分を前代未聞のサイコパスだと認め、二度とあなたの前に現れません」

「いいですよ」

俺はやけくそ気味におしぼりを置いた。

「受けて立ちましょう！」

店内はわっと沸いた。

「では、こうしましょうか。私、メモ用紙を持っています。これを一枚ずつ切り離して」

若松はご協力いただけますか？と紙を店内の客に配り始めた。ちなみに店内もれなく全員参加だ。

「皆さん！この紙に、『神様』と書いてみてください。それ以外は何も書かないでくださいね。書いたら見えないよう二つに折り、この紙袋の中に入れてください。私たち二人は後ろを向いていますから」

若松は A4 の茶封筒を机の上にのせた。

「最後の方が終わったら教えてくださいね。そして良さん、真美さんの字を当ててください。当てた方が勝ちです。名前は書いてありませんけど、自分の字って案外分かるものです。真美さん、正解だったら教えてくださいね」

「はい！」

真美が面白くなってきたあ！とばかりに瞳を輝かせた。

おい。これはクソ難しいだろ。女の字かどうかがうらひは推測できるものの、女が大勢いで全く見当がつかない。俺は紙片の山を散らかし考えあぐねたあげく、かわいらしい小文字の「神様」を選んだ。

「次は私ね。・・・ふうん」

若松は茶封筒をかき回して一枚の紙を取り出した。

「この字、様のハネが強くて勢いがある。右払いが長くて何かに熱中するタイプの・・・君かな？」

若松は店内にいた部活帰りらしき男子大学生を示した。

「すっげえ！あたりっす。やっぱ・・・」

大学生は彼女らしき女と息を飲み、周囲に激震が走った。

がさがさと紙を物色し、若松は一枚の紙を手を取った。

「あった！これよ！」

真美が飛んできて、その紙をひったくるように奪った。

「うそ、私の字！どうして？」

「ふふふ・・・やっぱり。あなたは今風の女文字を書くタイプじゃない。左払いが長く連綿線が強い。女子力が高くて人情に厚い。控えめすぎず、目立ちすぎないちょうどいい字ね」  
俺は舌を巻いた。たった二文字で、こんなにいる人間の中から一人を当てたって？

「わあ、なんだか嬉しいなあ・・・」

真美は赤くなった。

逆に俺は青くなった。

「おめでとうございます！これで交際決定ですね！」

真美は俺を振り返り、拍手を送り始めた。それを皮切りに、店内は嵐のような拍手に包まれた。

「へ？まっ、待ってくれ！」

「ちなみに、これ、私の字ですよ」

すると美帆とやらが俺の手から紙片を取り上げた。

「カワイイ字でしょ？」

何も言えずにいる俺の手を、美月が引っ張った。

「約束だよ。良、行こ！」

湧き上がる歓声を後に美月は呆然としている俺の手を引いて、ドアベルを響かせ珈琲店を飛び出した。

「本当にすごいですね。まさか当てるなんて」

俺は横を歩く美月に言った。美月は立ち止まり、にこっと笑った。

「もう、良ってば、なんて純粋でいい子なの！かわいい！」

美月はよしよしと俺の頭を撫でた。

「ん？」

何かおかしいぞ。

「実はね、あのメモ帳、切り離していくと、最後の一枚の上の辺に接着剤の塊みたいなのが付くのよ。最後の一枚だけにね」

美月は不敵に笑った。

「でね、私はわざと、最後の一枚を真美ちゃんに渡したんだ！絶対に間違えないようにね！」

「な……」

美月はさっき真美が書いた紙片を俺に突きつけた。

「詐欺師って呼んでくれる？」

何かの映画で聞いたような台詞だな。俺は突きつけられた紙を開いた。

「神様」と書いてあったはずだが、いつのまにか「カミ様」に書き換えられている。手品か。

「私をカミ様にしてよ。ね？後悔させないから」

「駄洒落で懐柔しようとしなくてくれ！」

これはもう俺にはお手上げだった。

俺はその二年後、今の会社を退職して書道用品店、書道教室、筆跡鑑定の会社を立ち上げることになる。俺のカミさんで最高の共同経営者こそが、上杉美月。旧姓若松。本人が断言したとおり、神様のようなカミさまだと、ここに遅ればせながら白状しよう。